

---

# アヤカシもどきの集う場所

ぷらむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アヤカシもどきの集う場所

### 【Nコード】

N8782Z

### 【作者名】

ぷらむ

### 【あらすじ】

ある秘密を背負った少女、遊憂<sup>ゆうゆう</sup>。

遊憂は、とある館に移住したのだが、そこに待ち受けていたのは不思議な（奇妙な？）人たちだった！

## 昔話

大昔のことでございます…。

かつて、アヤカシと人間が共存出来ていたころ…。

人々とアヤカシ、アヤカシと人々。

それは、引き裂こうとしても引き裂けない関係で結ばれておりました。

人々はアヤカシに『生命力』…いわゆる、アヤカシにとっての『命の根源』を分け…

アヤカシは『自然の波長』を創り上げ、人間達の暮らしに関わる川、山などを守っていたのです。

しかし、ある日を境に、その関係は、もろく崩れていきました。

ある人間の女と、アヤカシの男。

この2人は愛し合い、そして、子を産みました。

その子は、アヤカシにとっての命の根源、人間に欠かせぬ自然の波長。

この二つを創り上げることができたのです。

それが仇となり、2つの種族は互いを必要としなくなりました。

結局、子はアヤカシ側へ行き、人間は暮らしを守るため、文明を築きました。

こうして、ずっと続いてきた2つの種族の関係は薄れ、やがて消えていったのです…。

そして、時は平成。

ある少女のお話が、今、始まります。

誘坐来 遊憂と彪榼館（前書き）

えゝ  
…

すいません。

読みにくいかも…

## 誘坐来 遊憂と彪榎館

オレはいま、巨大な館の前にいる。

オレの名は誘坐来<sup>ゆうざらい</sup> 遊憂<sup>ゆうゆう</sup>。

やたら「ゆう」が多いが、まあ、そこは気にしないでくれ。

さつきからオレとか言ってるが、オレは女だ。

12歳だ。

子供だ。

女だ。（大事なことから、2回言っただぞ。by遊憂）

まあ、オレの容姿は…。

よく可愛いつて言われる。

紫のロングなんだが…面倒臭いから、よく後ろで一つにまとめる。

今日はまとめてないが。

服は…よく着るのが白と黒系。

きょうは珍しい赤だ。

よくスカートを着る。

それはともかく……

オレの前にある館は、彪榎館<sup>あやかしかん</sup>というらしい。

この街では超有名なのだ。

選び抜かれた超ラッキーな人だけが入れらしい。

そして、今日オレは此处に入る。

かかってこい！彪榎館！

意味のわからない闘志の炎を必死で消していると…

「あ！きみ？今日ココに入るひと」

気の抜けるような軽い声が聞こえた。

一人の男がデッカイ扉から出てきていた。

一言で言つと…

「チャライ…」

「おーい！聞こえてる聞こえてる！」

口から出ていたようだ。

でも口を塞ごうとする気は、無い。

「で、きみ？」

細いグリーンの瞳がオレの瞳とぶつかる。

「ああ。オレだがどうかしたか？」

「オレ」とオレが言った途端、ビククリしたように男の瞳が揺れた。

「君、おとく「女だ。」

「な〜んだ…びっくりしたジャン…」

「見た目で分かるだろう…」

ふ〜ん…と男が言い、

「ま、いいや！オレ、賽亞蛇さいあた 蠟ろう！案内役。ようこそ彪檉館へ！」

重そうな扉を片手で開けた。

ヒョロそうだけど、力あるんだな。

扉は鉄製っぽいし、厚みも相当ある。

ふ〜ん…

にやけそうな顔を押さえる。

ゴゴゴゴ…

ここから、オレの、新しい生活が…

オレは、新しい生活に微かな期待を寄せる。

それが、すごく疲れる生活だと言う事を、オレはまだ知らなかった。

## 彪壺館の正体（前書き）

長いです!!!



## 彪榎館の正体

蠟が扉をあけると、そこにいたのは一人の少女だった。  
かわいい人だ……

若草色の髪を結んで、同じ若草色の瞳はきりつとつりあがってる。  
でも、どこかふんわりとした雰囲気も持ちあわせている不思議な少女だ。

「あなたが今日、此処に来た人？わたしは遁抱のがいだいろは。よろしくね」  
わたしも案内役なの。と、握手をもとめてくるいろは。

オレは素直に手を伸ばした。  
すると、いろははガツとオレの手首を掴み、眼を覗き込んできた。  
すこしビクリしていると

「失礼。ちよつと確かめてみただけ。ビクリした？ごめんね」  
そう言い、静かに手を離れた。

違う。オレが驚いたのは、いきなり手を掴まれたことではなくて……  
いろはの手がとても冷たかったからだ。  
冷え症とか、そう言う冷たさじゃない。  
生きている限り、感じる事のない冷たさ……

感じてはいけない冷たさ……

そんなのをオレは確かに感じた。

それに、確かめるって、どういう意味なんだ？

一人で考えてると、蠟というはが前にいて

「おい？遊憂！おいて行くぞ！」

「遊憂っていうの？おい遊憂！」

と叫んでいた。

急いで駆けていく。

次についたのは、バカでっかい部屋。

「ここは……」

「「遊憂の部屋」」

一瞬眼が点になる。

ここがオレの部屋???

コノバカデツカイヘヤガ?????

いや、ホントに一瞬だけ。

すぐに真顔に戻って、

「ふーん…」

と言う。

たしかに、常人にとってはあり得ない事だろう。

でも、万年ポーカーフェイスのオレは一瞬で済んだ。

初対面の人に、間抜け面なんて見せたくない。

「へー…一瞬驚いただろ」

ギクツとなる。

「一瞬だけど、ちゃんとしたポカーン顔が見えたよ」

ギクギクツとなる。

くそ…なんで見えただ…!

「ま、この部屋を見て、そんな冷静でいられる人は珍しいぞ?」

蠟のフォロ―。

これで、少しだけオレの悲しみが減った。

ほかにもいろいろ案内してもらった。

大浴場、中庭、いろはの部屋、蠟の部屋、extra…。

最後に、中心にあるリビング…此处に住む住民の憩いの場。

ここは、住民からサウズと呼ばれている。らしい。

「実はここに連れてこいつて言われてんのよ、みんなから」

リビングにある扉は、門の扉よりは小さいものの…

それでも大きいという事には変わらない。

キキキキキ…

それでも重そうだ。

厚みもある。

開いたら、そこには2人の人物がいた。

1人は男性、なんか…

THE 平凡って感じ……

もう一人は女性、男性とは対象的にド派手だ。  
なんだろう…清楚な派手さっていうか…

言葉に表すのが難しい雰囲気を纏っている。

男性が口を開いた。

「僕は陽零ようれい 粕楽かすらって名前。よろしく。呼び捨てでいいからね」  
女性も言った。

「アタシは團まるろ？ 權那かりな。呼び捨てでいいわよ」

粕楽と權那は笑顔を見せてきた。

粕楽は笑うと一気に可愛く見える。

權那も笑うと若々しく見える。

なんか不思議だ。

「さて、本題に入るぞ！」

蠟は大声で切り出す。

すると、にこやかに笑っていた全員の顔が真顔に戻った。

「遊憂！ここの館の名前、覚えてるか？」

「彪檜館でしょ？なんでそんなこと聞くの？」

粕楽と蠟は顔を見合わせ、頷いた。

なんか、意味深な行動だ。

いろはが一息ついて、

「あなたは、人間じゃないわ」

「は？」

いや、ホントに「は？」しか言えなかった。

「いや、人間は人間なんだけど、人間じゃないっていうか…」

何を言っているんだ？この人は。

「つまり、アヤカシと人間のハーフってわけ」

「いや、なにがつまりに繋がんの」

アヤカシ？人間じゃない？

「話すよりみせたほうがいいだろー？いろは！」

蠟が、いろはになにかの助け舟をだす。

「あ、そつか！じゃ、私の手をよく見ててね！」

言われるがまま、じつといろはの手をみていると……

またたく間にいろはの手が猫の手になった。

「……………つつつつ！！؟؟」

叫びそうになるが、なんとか堪えた。

「おー叫ばないのか！」

感心したように蠟が言う。

「はあっ…はあ…で、あんた達は、なんなんだ！？もつと詳しく！」

「事の始まりは昔の話なんだ…」

粕楽が、第一話の昔話の内容を教えてくれる。

「つまり、お前たちはそのアヤカシと人間の子供だと…」

「んまーそういう事になるな」

相変わらず軽い！！

「君もなんだよ、遊憂ちゃん」

粕楽が苦笑しながら言う。

「オレも？」

「うん。此処は彪檜館。でも実は、その子供を保護する施設なんだ」

權那も説明してくれる。

「此処に移住したいと希望する人は年間1000人をゆうに越える

わ。でも、時々…その中にアヤカシと人間の子供がまぎれる事があるのよ。私達はその子だけ此処に入る事を許可するの」

「それで、さつきみたいに本当の事を教えるんだ」

そして、そこでオレは最初にいろはに、

「確かめる」

と言われていた事を思い出した。

「じゃ、あれは…」

「うん。私、心配性なところあるから、ほんとに此処に入る資格があるか、確かめてみたの」

「いろはの手が冷たかったのも……」

「うん。それも、アヤカシと人間の子供にある特徴」

自分じゃ分からないだろうけど、君も十分冷たいよ　とウィンクを放ついろは。

「じゃ、改めて自己紹介をしようか。」

少し不安が生まれたが、新生活へのワクワクをオレは抑える事が出来なかった。

オレの顔に、少し笑みが生まれていたことを、オレは知る由もなかった。

## 私は

「じゃ、改めて…」

粕楽がオレをまっすぐ見て言う。

「僕は陽零粕楽。ようれいかすらお母さんがアヤカシで蛇女なんだ」

「アタシは團？まるごかりな権那。父さんが吸血鬼なの」

「私は遁抱のがいだいろは。さっき見た通り母様が猫娘？もう娘じゃないけど」

「オレ、賽亞蛇さいあた 蠟ろうな。親父が鴉天狗なんだ」

へーこんなことあるんだーみたいな顔で聞いているオレ…。

でも、ひとつ、気になる事があった。

「で、オレは？」

言った途端、皆が固まった。

「うーん…それがねえ…分からないのよ…」

「分からないんだ…ハッ（笑）」

「ねえなに今の苦笑！」

そんな会話を繰り返していると…

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

響く爆音。

ガラスが割れる音。

いろはの部屋の方向だ。

なにも言わなくても、みんなもう分かっていた。

ほとんど同じタイミングで走り出すオレ達。

もちろん方向も一致している。

アヤカシの子供じゃなくても、このせっぱつまった空気から…

今の状況がただごとじゃないくらいわかる。

ついた…

いるのは、見る限り男1人だけ……。

蠟が舌打ちをして、オレの横を通る。

男の鳩尾を狙おうとするが、やっぱり避けられる。

いろはも爪だけ猫に変えて、応戦している。

でも、權那が…

「きゃっ……」

「權那！」

粕楽が駆け寄る。

そこを狙っていたかのように、蹴りをいれる男。

すごい痛そうだ。

呻き声を出す粕楽。

そのまま崩れ落ちてく。

こうもあっさり倒れるものなのだろうか？

アヤカシとやらの子供なのに。

オレも戦っているが、相当強い。この男は。

1人で5人を相手にするなんて、普通だったら出来ない。

いろはも投げ出され、床に倒れる。

（チッ…まずい）

このままでは、確実に負ける。

もう時間の問題かも知れない。

男は…まだ余裕がありそうだ。

ザワ……

……？

なんだこの胸騒ぎは。

なんか、良くないものが来るような…

ザワ……ザワ……

だんだんと近づいてくる。

『そのくらいなの？あなたの力は。』

声が聞こえる。

だれだ…！

『このままじゃ、負けちゃうわよ？それじゃ、あなたのプライドが許さないんじゃない？』

来るな…。来るな…！

『負けるの、嫌でしょ？』

来ないで…。

「なにこれ…」

ぼやける視界の中、蠟がゆっくり、ゆっくり、倒れていく。

『今まで、傍観者になりきってたみたいだけど、さすがに今回は無視できないわよねえ？』

意識が…遠くなって…

『私にまかせて…助けてあげる。』

視界が、黒い闇に、閉ざされた。



私は（後書き）

ねえ、文才をちょうだい

ホントウノ…(前書き)

いろは目線です。

ホントウノ…

「うっ…」

いろはは、一人で考えていた。

この男、強い…。

アヤカシの子供でも歯がたたないなんて…。

まず、アヤカシの子供と人間とは、体の作りが違う。

人間は、生活しやすい、戦闘を計算にいれてない身体の構造になっている。

しかし、アヤカシの子供は、非常に人間の体に近いのだが…

戦闘を計算にいれてるため、脚力などが異常に発達している。

だから、アヤカシの子供が人間に負けるなど、有り得ない話なのだ。  
なのに……

爪だけしか変化させてないとはいえ、人間に負けるなんて…

いや、こいつ、人間ではないのか…？

おなじアヤカシの子供だということも充分に有り得る。

そんな事を考えていると…

「遊憂…？」

遊憂の様子がおかしい。

虚ろな目になっている。

普段の彼女からは考えられない。

なにかあったのだろうか。

「なにこれ…」

小さく遊憂の声がきこえる。

「遊憂どうかしたの…」

今出せる声で最大限のボリュームで叫ぶ。

でも、聞こえてないみたい。

「遊憂！」

再び叫ぶ。

すると、遊憂を白い煙が隠した。

煙？

炎などはだれも持っていない。

だんだんと煙が晴れていく…。

完全に晴れた時…

そこには、9本の尾を持ち、銀の髪と銀の耳をたなびかせた少女がいた。

見かけは変わったが、彼女の漂わせている雰囲気は…そう。  
遊憂と同じものだった。

## 覚醒（前書き）

引き続き、いろは目線です！

## 覚醒

「遊憂：！？」

名前を呼び掛けても、反応はない。

遊憂は、眼を細め……

「去れ」

両手を突き出し、炎を出した。

でも、青かった。

青い炎だった。

縄のように細い炎は、男を縛りあげるように拘束する。

「ぐっ……！」

呻き声を出し、苦しむ男。

容赦がない。

遊憂は、それでも静かに…

「去らないのなら、消えろ」

手を叩いた。

すると、男を縛る炎の縄は、もつときつくなる。

「？？？…」

もう見ていられなくなっただいりほ。

「遊憂！遊憂でしょ！？もうやめて。だめだよ。死んじゃう」

「そうだぜ遊憂。人殺しになるぞ？」

「蠟の言う通りね。遊憂」

「そうだね。力ずくでも止めなくちゃね…」

上から、蠟、權那、粕楽。

いつの間に目覚めたのか、後ろで立っていた。

「…みんな…？」

眼に光を取り戻した遊憂は正気に戻ったらしく、炎の縄を緩めた。

「遊憂！分かったんだね。よかった…」

ぎゅっと遊憂を抱きしめる。

本当に良かった…！

半泣きになつてゐるのを悟られないよう、震えてゐるのを堪える。

「オレ、なに…を…」

バタリと倒れる遊憂。

「遊憂！」

「遊憂…！」

みんなで名前を呼び続けていると…

『あーあ…もうちょっとだったのに。残念』

頭に響いてきた言葉。

聞き覚えのない声だった。

みんなも聞こえたらしく、あたりを見回している。

『まあいいや。またくるよ。じゃあね、遊憂…と、その友達』

それっきり声は聞こえなくなった。

遊憂は意識を失っていた。

みんなはずっと、その場で立ち尽くしていた。

## 謎ト変化ト体験談（前書き）

最初だけほのぼの〜としています。  
書いてみたかったです。



## 謎ト変化ト体験談

「うつゝん…」

「あー！遊憂！？」

眼が覚めると、眼の前にいろはがいた。

間の距離、1？ってとこか。

…なんて冷静に分析してる場合じゃなくて、

「いろは。…近い」

「あつ、ゴメンね？じゃ、みんな呼びに行ってくるから！」

そう言つと、風の如く去って行つたいろは。

何というか…その…

「…元気だな…」

「そお？」

そう、声が聞こえた。横から。

おそろおそろ見てみると…

いろはがいた。

「速くないか！？」

「猫娘の力を使えば簡単よ」

そっか。

猫娘の子だったつけ。

「おいっ、遊憂！生きてるか！？」

「生きてる」

「遊憂！無事？」

「無事」

「ねえ、遊憂！自分の名前覚えてる！？」

「誘坐来遊憂」

質問ラッシュキターー（？）（？）——！！

つてやってる場合じゃなくて、

「なんでそんな質問をしてるんだ？その前に、なぜオレは寝ていた

んだ？」

「覚えてないのか？」

と、蛾が言う。

覚えてない？

オレは、あの時男と戦っていた。

で、あの声を聴いたところから記憶が無い。

「…オレになにかあったのか」

「！」

みんなの頭の上に！が浮かぶ。

「…ったく、お前の勘の良さには恐れ入るぜ」

「……………当たりか。当たって欲しくなかったが」

粕楽が、長いため息をつき、前回（詳しくは、「覚醒」を見てね）の事を、くわしく教えてくれた。

「……………で、オレが人間じゃない事が再確認できたわけか」

「まーそれもあるけど…」

「きつと、あなた（遊憂）の父母どちらかが、九尾の狐だったのね」  
九尾の狐……………。

オレが考えていると、いろはが、

「ねえ…“声”の事なんだけど…聴こえた…よね」

声？

それは、オレがあのと聴いた声と一緒にのものなのか？

いや、そもそも、みんなもあの声を聴いたのか？

「なあ、その声って……………」

オレは皆に説明した。

聞かせていくたび、みんなの顔が青ざめていくのが分かった。

「『また来る』って言ってたよね…」

「？それは聴いてないが」

あ、そっか、倒れた後だもんね。と、權那が微笑む。

でも、説明はしてくれなかった。

權那の事だろうから、負担を減らすために…とでも考えてるんだろ

う。

「なあ、もう変化できないのか？」

蠟が聞く。

オレはよく分からないが、とりあえず…

手足に力を込めてみる。そしたら、

変化出来た。

簡単に。

みんな口を開けて驚いている。

「声は……聴こえないか？」

言々と權那が返事を返してくれる。

「そう？まあ、聴かない方が心身共にいいんだけどね」

「まあ、遊憂はエリートなんだな」

「そうだね。こんな速く変化できるなんて…」

「天才ってヤツかな？」

なんかしつくりこないな…？

なんなのだろう？

試しに指を鳴らしてみる。

すると、炎が蛇のようになって、手の上に乗っかってきた。

なんか…愛らしいというか…

「なんか、ビックリが連続する回だな…」

蠟が、手を見て、頷き喋り始めた。

「ま、能力はいろいろ在るみたいだな」

それを聞いた途端粕楽が、

「そうだ！訓練しない？ほら、能力を操るためにもさ」

おーいいなーと共感してくるいろは、蠟、權那。

「待て。本人の了承を得てからやれ。そういうのは」

オレの言葉を無視し、じゃあ、やろう。という方向に話が進んだ。

どうにかしなくては…

訓練は正直、ヤダ。面倒臭いし。

「あつ、そうだ！オレ、頭痛いから、訓練は今度ってことに「よー



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8782z/>

---

アヤカシもどきの集う場所

2011年12月31日18時47分発行